

喜来でお宝発見か？

十一月初旬に喜来の国道沿いで遺跡の発掘調査が行われていました。ご存じのように十一号線拡張に伴う工事で県の埋蔵文化財センターの方が調査をしていました。重機で試しに掘ったところ大量の土器類が出土し調査期間も延長になったということでした。時代は今から千二百年前ということが土器の形状などから明らかになったということです。家の大きさは今の家の十畳くらいでしょうか学芸員さんの話では当時としては小さなもので二人ぐらいで住んでいたという話でした。十一号線からは二メートル程の深さになります。きれいに地層がわかれており上から一メートルは渦井川の砂と石で最近のもの、その下に田の土の層と水漏れ防止用の赤土が併せて三十センチ程、それから下は川砂、土、川砂で奈良時代に到達しました。砂は渦井川の氾濫の跡ということでした。家の前には幅二メートル位の小川が西から東に流れており水の便がよかったです。かまどのところには壺の底を抜いたものを四つ程つなげて煙を逃がすダクトにしていたということでした。土器の作り方も非常に巧く器用な方がここに住まわれていたようです。喜来のあたりでは縄文や弥生期の土器は出土せず、半田山などの少し高い地域でのみ見つかったことから川か海があった為、奈良時代のころまでは人が住めなかったかもしれないということでした。大生院でいうと上本郷や旦の上などの地域は土地の海拔があるため古い時代のものもある可能性が高く『郷』という字がつく地は遺跡

がよくでるということでした。正法寺は秦氏によって奈良時代創建されたということですのでもしかするとお寺の造営に携わった方かもしれません。ある資料によると県内の秦さんが二六五戸あり内、新居浜と西条だけで二百戸あるということです。四国全体でも秦さんは四四〇戸ということなので東予だけで約半数の秦さんがいるということです。ご年配の方の話では喜来のあたりでは昔からよく土器がでていたということです。また渦井川も昔は萩生のほうへ流れていたという話もよくなります。昔からの言い伝えというものは私たちが思っている以上に正確なのかもしれません。夕暮れになり学芸員さん一人で最終の測量をしていました。三日後には埋め戻され遺跡はまた長い眠りにつくそうです。かまどの所には墨の跡が残っています。今時はゆうげの煙が空にあがっている頃でしょうか。大生院を作ってくれた遠いご先祖様に感謝致したいと思います。

